

児童期から青年期前期の愛着測定
—児童愛着面接（CAI: Child Attachment Interview）の可能性—

向 井 隆 代

Assessing attachment in childhood and adolescence: The Child Attachment Interview (CAI)

The purpose of this article was to introduce a newly developed instrument for assessing attachment in middle childhood and adolescence. The Child Attachment Interview (CAI) is a semi-structured interview that is designed to elicit children's mental representations of their attachment relationships through direct questioning and calls on children to describe and reflect on their current attachment relationships and experiences. First, a brief history of the development of the interview protocol is introduced, followed by a description of the coding and classification system. Second, the differences and similarities between the CAI and the extant attachment measures, the SSP and AAI, are described. Third, the unique contributions that the CAI could bring to the field of attachment research are discussed. Finally, the issues that need to be addressed to examine the CAI's applicability to Japanese children and adolescents are discussed, along with its strengths and limitations.

愛着とは、ボウルビィによれば、乳児が自分の生命を護り、安全と安心とを確保するために主要な養育者に助けを求めることを指す (Bowlby, 1973)。愛着は生命の存続を支えるシステムとして人間が身に付けた生得的な傾向であり、人間はその傾向を生涯にわたって持ち続けるとボウルビィは考えていた。愛着関係は、親子関係全般を意味するものではなく、関係の限定的な部分であり、特別な機能をもつものである。すなわち、不安やストレスで生存や精神の安定が脅かされる状態に陥ったときには、愛着の対象に近接し、安心できるという感覚 (a sense of "felt security") を制御する、養育者との関係の中で、そのように機能する側面を指している (Shmueli-Goetz, 2017)。したがって、愛着の中核的な機能には、生き延びを支える機能に加え、情緒的な生き延びを支える機能も含まれる。特に後者は、Bowlby (1951, cited in Shmueli-Goetz, 2017) が "a psychic organizer" と呼んだ機能であり、子どもの成長に伴いより重要になっていくと考えられる。

愛着は生得的な傾向であると考えられているため、非常に特殊な状況で育つ場合以外は、愛着形成はなされると想定される。しかし、愛着の質には個人差があり、これまでの研究で、安定した愛着と不安定な愛着に分けられている。乳児期の安定した愛着がさまざまな側面の適応と関連しているのに対し、不安定な愛着は、攻撃性や仲間関係の問題、うつや不安といった不適応との関連が指摘されている (Groh, Fearon, Bakermans-Kranenburg, van IJzendoorn, Steele, & Roisman, 2014)。

さらに近年、理論的にもまた実証研究においても、複数の情動やフラストレーションへの耐性など情動制御、および生理的興奮や注意の制御など、社会的情報処理や社会認知的側面の発達と愛着の関連が指摘されている (Brumariu, 2015; Zimmermann & Iwanski, 2015)。学童期における愛着との関連において近年注目を集めている領域の一つに、メンタライゼーション (mentalization; Fonagy, Gergely, Jurist, & Target, 2002) と呼ばれる、自己と他者の心の状態やその変化や多義性を想像する能力がある。メンタ

ライゼーションは、他者との関係の中で生きていくに欠かせない能力であり、安定した愛着がその発達の基盤にあると考えられている (Luyten & Fonagy, 2014)。

乳幼児の養育者に対する愛着は、1970年代に開発されたStrange Situation Procedure (ストレンジ・シチュエーション法, 以下SSP) により査定する方法が確立された。その後、成人の愛着については、愛着を表象としてとらえるAdult Attachment Interview (成人愛着面接, 以下AAI) が開発され、日本国内においても乳幼児と成人を対象として愛着研究が進められてきた。しかし、児童期から青年期前期の子どもたちの愛着を測定する方法の開発は、長らく試行錯誤が続き、この年代は愛着の測定ギャップ (measurement gap; Green & Goldwyn, 2002) と呼ばれていた。

Child Attachment Interview (児童愛着面接, 以下CAI) は、Anna Freud National Centre for Children and Families (以下AFC) の研究チームが開発した8歳から12歳児 (後に15歳まで拡大) を対象とする半構造化面接法である。子どもの語りと行動観察の両方から、メンタライゼーションも含めて安定 (または不安定) な愛着にみられる特徴を分析していく手法である。児童期後期から青年期にかけての愛着は、CAIによって初めて査定することが可能となり、欧米を中心にデータが蓄積されつつある。本稿は、CAIを紹介し日本における活用可能性や課題を考察することを目的とする。

愛着の査定方法と愛着分類

愛着の査定方法として、もっともよく知られているものは、乳幼児の行動をもとに愛着の質を査定するSSPであろう。SSPは、一連の実験的な手続きの中で生後12か月～18か月の子どもの子どもがとる行動をもとに、特定の養育者への愛着分類を査定する方法である。安定型 (Bタイプ)、不安定型 (回避型Aタイプとアンビヴァレント型Cタイプの2種類) の合計3種類の分

類がAinsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) によって提案され、その後、追跡調査を含む多くの研究の結果により、安定型 (Bタイプ) の子どもの適応が、不安定型 (AタイプとCタイプ) の子どもよりも全般的に良好であることが知られるようになった。SSPはアメリカ以外の国においても実施され、妥当性と信頼性に基づく乳幼児期の愛着分類を査定する方法として広く用いられている。

Ainsworth et al. (1978) による3タイプの愛着分類に加え、後に、Main & Solomon (1990) により、無秩序／無方向型 (Disorganized/disoriented, Dタイプ) の分類が提唱され、特にDタイプの子どもたちは虐待や養育者の精神疾患などを経験している割合が多いという報告が相次ぎ (Moss, Bureau, St-Laurent, & Tarabulsky, 2011)、1990年代以降、発達臨床的な観点より愛着の実証的研究がさらに活発化した。現在では、愛着分類はDタイプも含めて4タイプと考えることが支持されている。組織化されていない愛着であるDタイプは、精神病理との関連も示唆されており (Borelli, David, Crowley, & Mayes, 2010)、心理的適応の側面から支援や介入をもっとも必要としていると考えられている。

乳幼児を対象とするSSPの次に、成人の愛着を面接によって査定する方法としてMainやGeorgeらによって開発された半構造化面接法がAAIである (Hesse, 1999)。SSPが乳幼児の行動をもとに愛着の質を査定し、愛着分類を決めていくのに対し、AAIは、成人に子どもの頃の養育者との関係を思い出して語ってもらい、語りの内容と語り方をもとに、愛着対象との表象的關係を評価し、愛着分類を決めていく手続きである (Main, 1996)。表象的關係とは、こころに思い浮かべる愛着対象との関係であり、乳幼児期の愛着対象との交渉を通して形成され、他者の言動を解釈したり、自己の言動を調節したりするときの基盤になる内的作業モデル (Internal Working Model) とも呼ばれる。

AAIでは、語りの特徴を詳細に分析することにより、母親、父親、その他の主たる養育者のそれぞれに対し、安定型 (自律型Fタイプ) と不安定

型の3つのタイプ (Ds, E, U) のいずれかに分類される。AAIにおけるFタイプは、SSPにおけるBタイプに対応し、同様にDs (軽視型) はAタイプ (回避型), Eタイプ (とらわれ型) はCタイプ (アンビヴァレント型), U (未解決型) はDタイプ (無秩序/無方向型) にそれぞれ対応すると仮定されている (Hesse, 2016 ; 上野・北川, 2017)。

AAIはアメリカで開発され、実施要領および分析方法の訓練は英語でなされている。面接の逐語記録をもとに分析し、愛着分類を決めていくコーディングの訓練を経て、信頼性を確立できているかの確認テストに合格した者のみが、有資格者として面接記録の分析を実施することができる。査定方法としてのAAIの妥当性は確立されており、英語圏を中心に諸外国で実施され、成人期の愛着の査定や愛着の世代間伝達の研究に多く用いられている。日本においての実施はまだ限られてはいるが、今後活発化することが期待されている。

学童期以降の愛着の測定の試み

乳幼児を対象とするSSPと成人を対象とするAAIは共に愛着の査定方法として、現在では基礎的研究から臨床場面も含めて広く用いられている国際標準的方法である。また、乳幼児と成人の間の年齢の人々を対象として愛着を査定する方法の開発も行われてきた。たとえば、幼児期から児童期の前半 (およそ4歳~9歳) に対しては、SSPの手続きを幼児向けに改変した6 year reunion procedure (Main & Cassidy, 1988) やAttachment Doll Play (George & Solomon, 2016), またStory Stem Procedure (Emde, Wolf, & Oppenheim, 2003) などが開発され、そのいくつかは日本の幼児児童を対象に実施されている (Behrens, Hesse, & Main, 2007 ; 山川, 2006)。しかし、それらの行動評定や投影的遊戯法は、幼児や低学年児童には適用可能であるものの、高学年以上の児童生徒に対しては、発達段階に照らして妥当であるか疑問とされた (Shmueli-Goetz, 2014)。すなわち、

児童期後期以降の愛着の査定では、言語による表象をとらえるのか、行動観察を主体とするのか、どちらが妥当かという議論が展開された。

一方、AAIを10代前半の児童生徒に実施した試み (Ammaniti, van IJzendoorn, Speranza, & Tambelli, 2000) もなされたが、比較的短い反応や断片的な記憶に基づく反応が多かったことから、児童期後期から青年期にかけては、愛着軽視 (Dismissing) の方略が増加する可能性が指摘された。しかし、それがこの発達段階の愛着組織を反映しているのか測定誤差なのかは明らかではない (Shmueli-Goetz, 2014)。また、10代前半の人々にAAIを実施した場合、語りすなわちディスコースの分析のみに基づく評定では、非言語的コミュニケーションに現れるDタイプの特徴をとらえることができない点も課題として指摘されていた (Target, Fonagy, & Shmueli-Goetz, 2003)。さらに、大人において喪失やトラウマが未解決である心の状態と、児童青年において愛着に関わる問題が未解決である心の状態を、同じ評価基準でとらえることがそもそも妥当ではないかもしれない (Shmueli-Goetz, 2014)。発達精神病理の考え方に基づくならば、児童の成長と共に病理や問題も「発達」するため、Dタイプ (Uタイプ) の特徴も、子どもの発達に伴い現れ方が異なっていくことは考えられる。学童期の愛着の査定には、行動観察よりもむしろ安心感に基づく心的探索 (security of mental exploration) の評価が必要であり、それは主として語りの分析によってなされるべきという指摘 (Grossmann, 1999) を踏まえてはいたものの、AAIは10代前半の人々にとっては、所要時間が長すぎ、また幼少期の記憶を要求することは、大きすぎる課題であった可能性も否めない。

さらに、子どもの自伝的記憶の発達に関する研究結果からも、10歳未満の児童は、記憶を時間軸に沿って系統化することが容易ではなく、過去の経験よりも最近の経験をより想起しやすいことが知られている。AFCでは、そうした子どもの自伝的記憶や語りの特徴をふまえ、子どもの反応を回避や無秩序 (AやDタイプ) の愛着と誤認する危険性も考慮に入れたう

えで、面接法によって愛着の内的表象を査定する方法の開発が行われた (Target et al., 2003)。

CAI (Shmueli-Goetz et al., 2008) は、子どもの語りと行動観察の両方に基づき、表象レベルでの愛着組織 (attachment organization) をとらえるように設計されているが、それは児童期の愛着に関する以下のような前提に基づいている (Shmueli-Goetz, 2014)。

まず、児童期の愛着において重要なことは、乳幼児期のように愛着対象への身体的、物理的近接ではなく、いざという時に、愛着対象を当てにすることができるかと子どもがどの程度確信しているか (表象的近接) を査定することである。また、成人における愛着の査定は、愛着に関するところの状態 (“state of mind”) が統合されていることを前提としているが、児童期はまだ統合途中で、複数の内的作業モデルが同時に存在する可能性もあることを想定している。そして、子どもは不安などの情動をコントロールすることが大人より難しいため、面接中に子どもが見せる非言語的行動にも心の状態が反映されると想定し、語りに現れる子どもの心的探索と行動観察を併せて愛着方略を査定する。

CAIは全部で18の質問から構成されており、その一部はAAIから適用されたものである。所要時間は30分程度で、SSPやAAIで得られる4つの愛着分類に対応する分類を複数の養育者に対して決定する。最初は8歳から12歳を想定して開発され、その後適用年齢は15歳まで拡大された (Venta, Shmueli-Goetz, & Sharp, 2014)。

CAIの概要

CAIではAAIのように幼少期について問うのではなく、“here-and-now” (今、ここ) での養育者とのやり取りについて直接質問し、今現在、愛着対象の情緒的な利用可能性 (availability; 遠藤, 2010) を子どもがどうとらえているかによって、愛着の質を査定する。

AAIが、過去の親子関係についての愛着経験の語りをもとに、現在の愛着の表象をとらえるのに対し、CAIは、現在の愛着経験の語りをもとに、愛着に関するところの状態（“state of mind”）をとらえることを試みる。想起された愛着対象に対する表象的近接のあり方を問題にする手法（安藤・遠藤，2005）である点は、AAIと同様である。また、被面接者は、養育者との関係について全体的な描写（general description）と矛盾しないエピソードを記憶の中から思い出して語ることを求められる点も、AAIと似通っている。ただし、CAIでとらえようとするのは、過去ではなく現在の表象であり、子どもの語りを促すための工夫が、面接の構造にも面接者のトレーニングにも含まれている。

面接者は、子どものエピソード記憶の再生を手助けし、子どもの口に言葉を取り込むことなく、プロンプト（追加質問や、語りを促す働きかけ）をすることにより、子どもの表象の世界を子ども自身の視点から語る手助けをするよう訓練される。CAIには、情緒面での情報処理を刺激することをねらって、ところの状態を問う質問が用意されている。それらにより、愛着に関わる具体的なエピソードを思い出し、時には語る事がやや難しいエピソードを語っていくなかで、どの程度自分の感情と注意を制御し、まとまりのある語りをすることができるのかを評価していく。面接者による適切なプロンプトすなわち足場かけ（scaffolding）には、子どものメンタライゼーションを促すねらいも含まれている。特に子どもの情緒的な情報処理過程に焦点を当て、子どもが自己の感情、他者の感情、経験の意味をどのように理解しているのかを評価する。

CAIは全部で18の質問から構成されており、その一部はAAIから適用されたものである。まず自分を表現する3つの言葉を求め、具体的なついで養育者について3つの言葉を求める。それぞれの言葉に対して、具体的な最近の記憶を求めていき、葛藤や傷ついた経験、離別や喪失体験に焦点をあてていく。

CAIでは、児童がストレンジャー（初対面の大人）から面接を受けるこ

と、加えて養育者との関係というきわめてプライベートな内容について質問を受け、具体的に語ることを求められる手続きで、いわば軽いストレス状況を作り出し、児童の愛着システムをマイルドに活性化することを想定している。この前提はSSPやAAIと同様である。録画を原則とする面接の中で、面接者は直接的な質問を行い、誘導はしないで必要な情報を児童から得るように面接を進めていく。応答につじつまが合わないことがあっても指摘しない。面接者は、愛着対象との関係を児童がどのようにとらえているかを査定するために、愛着対象とのやり取り、すなわち関係のエピソード (relationship episode, 以下RE) について探索し補足的な質問を行っていく。面接を実施するにあたって、また、録画と面接記録を分析し愛着分類を査定するにも、専門的な訓練を要する。なお、面接を実施するトレーニングおよび面接記録を分析するトレーニングや認定資格を得るためのテストもAFCで行われている。

面接終了後に分析と評定を行うためには、専門的な訓練を受ける必要があるため、分析方法の詳細はここでは紹介できない。逐語記録と録画を詳細に検討し、語られたREを確認し、各エピソードを一つ一つコード化していく作業から開始する。得られたコードは、児童の各愛着対象（養育者）に対する愛着分類を決めていく基盤となる。

CAIの評定方法

コーディング・システムは、以下の8つのスケール（評価尺度）から構成されている。いくつかのスケールはAAIのスケールをもとに児童用に改訂されたものであるが、反応コードは発達段階を考慮して設定されている (Shmueli-Goetz et al., 2008)。

- ①とらわれた怒り (Preoccupied Anger) は、おさまりがつかない未解決の怒りや不満を表出する程度を表す。
- ②理想化 (Idealization) は、愛着対象の表象が、良い方向にゆがめられ

ている程度をあらわす。

- ③軽視と蔑視 (Dismissal and/or Derogation) は、愛着対象や愛着の重要性を過小評価する方略を用いている程度を表す。

以上の3つのスケールは、母親、父親、その他の主たる養育者のそれぞれについて評価する。以下の5つのスケールは、養育者ごとの評価は行わない。

- ④情緒表現の豊かさ (Emotional Openness) は、語りの中で感情をどの程度自由に表現するか、特に感情と人の心的状態と行動との結びつきを理解している程度を表す。

- ⑤エピソードの適切さ (Use of Examples) は、愛着対象の表象に合致する具体的なエピソードを思い出し語るができる程度を表す。

- ⑥肯定的／否定的言及のバランス (Balance of Positive/Negative) は、自分自身や愛着対象について語る際に、肯定的側面も否定的側面も含めて言及し、表象レベルでの愛着関係のバランスがとれている程度を表す。

- ⑦葛藤解決 (Resolution of Conflicts) 葛藤や衝突後に何らかの解決が語られるか、葛藤が未解決のままにされるかを評価する。

- ⑧語りの一貫性 (Overall Coherence) は、①から⑦までのスコアに加え、面接全体の首尾一貫性や矛盾、自己と他者の心的状態を思考する能力などを考慮して評価する。

以上のスケールを、それぞれ1点から9点の9件法で評価し、子どもの語りと語り方 (非言語的行動も含む) の両側面より、愛着に関する現在のこころの状態の全体像を査定する。さらに、無秩序／無方向性 (Disorganization/disorientation) に関しては、以上の評価尺度とは別に、面接中の行動観察と語り方の特徴に基づいて、その有無を評価する。したがって、Disorganization の程度の得点化は行わない。

SSP, AAIで得られる4つのパターンに対応する4つの愛着分類を各愛着対象について決定する。

CAIにより得られる愛着分類と各分類の語りの特徴

安定型 (Secure) は、自分について肯定的な面も否定的な面もバランスよく表現することができる。養育者との関係についても同様に、否定的な面も肯定的な面も語るができるか、もしもポジティブな側面のみを語る場合も、合致するエピソードを具体的に思い出して語るができる。愛着関係の理想化や軽視がほとんどなく、葛藤や衝突の経験が語られる場合も、怒りにとらわれることなく語り、仲直りなど解決のプロセスが語られることもある。全体的に話にまとまりがあり、理解可能である。

軽視型 (Dismissing) は、自分自身についての語りが身体的特徴など表面的な内容のみであったり、ほとんど語らなかつたりする。養育者との関係についても、否定的側面がほとんど語られなかつたり、思い出せなかつたり、肯定的な内容をあげても具体的なエピソードを語るができず、愛着関係を理想化している傾向がある。離別や怪我、葛藤などについて覚えていないと主張したり、愛着危機と考えられる状況においても自分だけで対応したりするなど、時として年齢不相応の自立が強調され、養育者との関係の情緒的な交流よりも、行動的側面やプレゼントなど物を介した交流が語られることが多い。

とらわれ型 (Preoccupied) は、自分に都合の良い自己イメージを提示する傾向があり、養育者との関係については、語りが冗長で過度に詳しく、しばしば脱線を伴いわかりにくく、話が向かっていく方向が見えにくい。面接者の共感や同情を引くような発言があつたり、自分と養育者との関係を語る際に、怒りや抑うつなどの情緒的な混乱がみられたりする。養育者の「あてにならない」「役に立たない」というイメージを裏付けるようなエピソードが繰り返し語られる。

回避型ととらわれ型は対極にあると考えられている。回避型が愛着のニーズを認めず、愛着関係そのものを軽視しているのに対し、とらわれ型

は、愛着のニーズが満たされておらず、愛着対象を軽視していると考えられる。

無秩序／支配型（Disorganized/controlling）は、表象のレベルと行動のレベルの両方で組織化されていない状態（disorganization）が見られる。組織化されていない愛着とは、表象レベルでは、語られる事実自体に矛盾があったり、説明に「魔術的な」考えが侵入したり、思考の連関が奇異で理解できないといった特徴がみられる。行動レベルでは、情動制御が困難であり、突然笑い出したり、恐怖の表情を浮かべたり、解離が見られることもある。また、面接者に対し、進行中の面接をコントロールするような行動が見られたり、養育者をコントロールすることがうかがえるエピソードが語られたりする。

以上の4分類は、SSP、AAIの4分類に対応し、CAIにおいて得られる語りの特徴から、CAIはSSPにおいてみられる乳児の行動の特徴を表象レベルでとらえようとしていることがわかる。安定した愛着をもつ乳幼児が、愛着対象を安全基地として周囲を探索し、必要な時には愛着対象に対し近接行動をとると同様に、安定した愛着をもつ児童の語りは、自伝的記憶の中で愛着対象との関係を自由に探索し、心の中の愛着対象に対し防衛や恐れなく容易にアプローチできることを示していると仮定されている。

CAIの信頼性・妥当性

CAIの精神測定学的特徴の検討は、イギリスの児童（健常群と複数のリスク・グループ）を対象にまず実施され、その後アメリカなど英語圏を中心に、イタリア、イスラエル、ギリシャ、ノルウェー等でも実施されている。ピア・レビューを伴う英文学術誌に発表された39報のCAIを用いた研究を概説したPrivizzini（2017）によれば、CAIは臨床群と非臨床群の両方において、愛着組織を査定できる妥当性と信頼性が確認された方法であることが報告されている。以下にその根拠をいくつか紹介しておく。

構成概念妥当性については、臨床群においても、非臨床群においても、SSP等を用いた研究で得られている愛着分類の分布に近いパターンの分布が確認され、臨床群では、非臨床群より不安定型の割合がより高かったことから、確認されている (Shmueli-Goetz et al., 2008)。同時に8つのスケールそれぞれの内的整合性も確認されている。

弁別的妥当性については、CAIによる愛着分類やスケール得点は、人口統計学的指標、(年齢、性別、IQや語彙力、親の教育年数) や子どもの気質とは関連していないことが報告されている (Borelli, Somers, West, Coffey, De Lo Reyes, & Shmueli-Goetz, 2016)。

基準関連妥当性 (併存的妥当性) は、面接結果のスケール得点および得られた愛着分類が、Kerns Security Scale (Kerns, Klepac, & Cole, 1996)、Inventory of Parent and Peer Attachment (Armsden & Greenberg, 1987) などの自己記入式調査票の尺度得点と予想通りの関連を示したことから、確認されている (Borelli et al., 2016)。またSeparation Anxiety Test (Wright, Binney, & Smith, 1995) との関連も報告されている (Shmueli-Goetz, et al., 2008)。

CAIの可能性と応用可能性

CAIは、長らく愛着研究において実証研究の空白期 (遠藤, 2010) と呼ばれてきた児童期後期以降の子どもたちを対象に、現在進行形で愛着の質を査定することを可能にした。一般家庭の児童においても、支援や介入が必要とされる児童においても、学童期から青年期にかけての親子関係の変化を愛着の側面からとらえることは重要な課題であり、学術的、臨床的意義は、大きい。現在のところ、少なくとも以下の3つの観点より、CAIの貢献を予想することができる。

①愛着の連続性の検討への貢献

乳幼児期の愛着分類は比較的安定的である一方、対人関係や環境の変

化により長期的には変動する可能性もあることが、メタ分析 (Fearon, Bakermans-Kranenburg, van IJzendoorn, Lapsley, & Roisman, 2010) から示唆されている。乳幼児期にSSPを実施した対象者を長期間追跡し、乳幼児期の愛着分類と約15年～20年後にAAIで査定した愛着分類が一致するかどうかを検討する研究も報告されている (Lewis, Feiring, & Rosenthal, 2000 ; Waters, Weinfield, & Hamilton, 2000)。しかし、それら縦断研究の結果は、必ずしも愛着分類や内的作業モデルの連続性を指示するものばかりとはいえ、連続である場合もあるが、連続でない場合は多く家庭環境の要因が背景にあることが指摘され、乳幼児期以降の愛着の連続性についてさらなる検討が必要と結論づけられている (Waters, et al., 2000)。国内で実施された縦断研究からも、乳幼児期にSSPで査定された愛着分類と、成人期に実施したAAIによる愛着分類の一致率は必ずしも高いとはいえ、愛着が変わりうる可能性が示唆されている (高橋・石川・三宅, 2009)。乳幼児期と成人期の間の年齢で、愛着を査定することができれば、愛着分類や内的作業モデルの安定性および可変性を検討することができる。

②臨床場面への応用可能性

SSPの適用が適切ではない8歳以上の児童に使用できるCAIを用いることによって、たとえば虐待経験等により乳幼児期に安定した愛着を築くことができなかつた場合に、その後、安定した養育環境への移行に伴い児童期や青年期までの間に安定した愛着を築くことができるのか、養子縁組や里親、あるいは施設職員との間にも愛着を築くことができるのかといった、愛着の可塑性を検討することが可能になる。既に海外では、虐待経験のある児童を対象に、彼らが里親あるいは施設に移行する前後にCAIを用いて実親や養親に対する愛着を査定する試みが始まっている。たとえば、イギリスで、10歳から16歳の児童生徒が里親養育に移行して最低5か月以上経過した後の愛着を、CAIを用いて査定することにより、実母への愛着は已然として安定型が少なく回避型やDタイプが多かつたものの、養母

よび養父への愛着は、安定型が約半数を占め、不安定型の多くが回避型であったことが報告されている (Joseph, O'Connor, Briskman, Maughan, & Scott, 2014)。養母への愛着の安定性は、子どもの問題行動の少なさとも関連しており、すなわち虐待経験のある児童であっても、青年期までに安定した愛着を形成しうることが示されている。

CAIは複数の重要他者との関係を査定することができるため、児童にとっての重要他者の中から特に重要な愛着対象を査定することも可能である。母親に対する愛着が安定でなくとも、他に安定な愛着対象がいる可能性を同時に査定することができることもCAIの強みである。イギリスでは、発達臨床心理学の研究のみならず、児童の里親へのプレイスメント後のフォローアップや、被虐待児への介入の効果検討など、社会的養護のさまざまな場面で活用されている (Phillips, 2014)。

③発達精神病理学への貢献

愛着の発達の変化や安定性を検討することは、同時に、対象者によっては、症状や病理の発達の変化をとらえていく過程にもなりうる。特に多くの関心が寄せられているのは、Dタイプの子どもたちの社会認知的側面や自己制御能力など自我機能の発達の様相であろう (Henninghausen, Bureau, David, Holmes, & Lyons-Ruth, 2011; Moss, Bureau, St-Laurent, & Tarabulsky, 2011)。情動制御の困難さや解離傾向、奇異な思考、役割逆転 (role-reversal) や支配的なふるまいなど、表象レベルおよび行動レベルでのdisorganizationの特徴が、発達に伴いどのように表れてくるのかを明らかにすることができれば、問題の早期発見にもつながっていくであろうし、学術的意義だけでなく、臨床的意義も大きい。さらには、CAIを用いてメンタライゼーションの査定を行う試みも報告されている (Ensink, Normandin, Target, Fonagy, Sabourin, Berthelot, 2014)。愛着の質に加えて、メンタライゼーション能力の査定が可能になれば、介入や支援の効果研究にも応用可能性が広がるであろう。

日本でCAIを用いるにあたっての課題

最後に、CAIを日本人児童に実施するにあたっての課題を考察する。AAIを日本で実施するにあたっての課題については、Takahashi & Hatano (2009) が考察している。アメリカで開発されたAAIとは異なりCAIはイギリスで開発されたものであるが、トレーニングやコーディングの資格に関しては、AAIとはほぼ同様の手続きがとられている。CAIの日本での適用可能性の検討は、CAI日本語版の妥当性・信頼性の検討のみならず、日本の児童が日本語で家族について語る営みが日本の文化社会のなかでどのような意味をもつのかという視点をふまえる必要がある。したがって、AAIについてTakahashi & Hatano (2009) が述べている課題の多くは、CAIにも共通していると考ええる。

Takahashi & Hatano (2009) は、AAIを日本人に適用する際に考慮すべき課題として、大きく以下の3点を挙げている。

①個人的な経験を話さない文化規範

初対面の面接者に個人的な経験を語ることは、日本の伝統的な文化規範に照らし一般的ではない。よって、AAIを用いる研究に協力同意を表明した面接協力者も、家族について特にネガティブなエピソードを直接語ることは躊躇するであろう。したがって、「思い出せない」という協力者の反応が、過去の経験を無意識に抑圧しているのか、意識的に語らないことを選んだのかという判断は非常に難しい。

②特に母親について否定的側面を表明しない文化規範

母親についての語りには、文化的スクリプトが存在しそれに合致する語りがなされるとTakahashi & Hatano (2009) は指摘している。すなわち日本社会では、母親は献身的で子どものために自己を犠牲にする存在という社会通念があるため、母親の否定的側面や母親とのネガティブな記憶は語られないか、語られた後で「肯定的な締めくくり」(“a positive wrap-

up”)が用いられることが多いと指摘している。面接の中で母親への言及が肯定的な面に偏っていたり、具体的なエピソードの語りが乏しかったりする場合、AAIやCAIの評価基準では理想化や愛着軽視の傾向があるとみなされうる。

③日本語という言語の性質による課題

英語では必ず主語があり、時制が明確であり、単数か複数かも文法上明確にされるのに対し、日本語は、主語だけでなく目的語も省略されることが多く、日本語の語りにAAIの基準をあてはめると、曖昧でわかりにくいと評価される可能性もある。

以上の理由より、AAIのコーディング・システムを日本人協力者の語りの分析に直接適用することは限界があることをTakahashi & Hatano (2009) は考察している。①と②は、文化的規範による課題であり、③は、日本語という言語の性質による課題である。

①については、CAIにも共通する課題であろう。AAIとCAIに共通する、愛着システムをマイルドに活性化するねらいで設定されている、個人的な経験を面接者に語るという営みのもつストレスが、Takahashi & Hatano (2009) が指摘しているように、日本人においてはより大きい可能性があることは否めない。②についても、CAIは母親についてのみ質問するわけではないが、母親に対するネガティブなエピソードを語りたがらない傾向は、日本の子どもにもあるかもしれない。ただし、AAIと異なりCAIには、いくつかの工夫がなされており、養育者について質問する前に、まず自分について語ってもらうことは、面接に慣れてもらう意図もある (Shmueli-Goetz, et al., 2008)。さらに可能な限り率直に、過去の記憶ではなくて現在の養育者とのやり取りを語るよう促される。

また、②については、AAIは、Griceによる会話の公準 (Grice, 1975, cited in Takahashi & Hatano, 2009) がその評定の基礎となっていることと関係している。語りの一貫性 (矛盾のなさ、信憑性)、語りの量 (多すぎず、十分な分量の情報か)、語りの適切さ (質問に対する関連性)、語り

の様式（不自然な流れやごまかしのなさ）といった会話の公準は、CAIのコーディング・システムにも反映されており、特にOverall Coherenceのスケールはこれらにどの程度沿っているか、あるいは違反しているかを加味して評定される (Shmueli-Goetz et al., 2008)。しかし、その他のスケールの評定やコーディングの基盤にされているのは、語りを関係のエピソード (RE) に区分して分析する手法 (Luborsky & Crits-Christoph, 1990, cited in Shmueli-Goetz, 2014) であり、個々のREを各スケールに沿って分析したうえで、総合的に評定を決めていく。

以上のように、AAIを日本人に適用する場合に考えられる課題の多くは、CAIを日本人児童に適用する場合にも同様の課題としてあげられるであろう。加えて、CAIの適用年齢である8歳から12歳ないし15歳の社会認知的発達を踏まえると、さらなる課題も存在する。

被面接者が大人ではなく、8歳から15歳の適用年齢の範囲の児童では、語彙力や認知的発達の年齢差、個人差は非常に大きい。CAIは被面接者の知的水準による影響は受けないことが報告されている (Shmueli-Goetz et al., 2008) が、発達障害の症状をもつ児童はdisorganizationの評価を受けやすいことも報告されているため、対象児童の神経生物学的な脆弱性を十分考慮に入れて査定を行う必要があることが指摘されている (Shmueli-Goetz et al., 2011)。また、児童の年齢を考慮して愛着危機状況の程度とそれに対する児童の反応が年齢相応かどうかを判断し、スケール得点を決めていく必要がある。コーディングのトレーニングは、発達心理学的な観点も踏まえて行われる。半構造化面接であるため、適切なプロンプトによる足場かけ (scaffolding) が必要であり、CAIを実施する面接者も、児童期の語彙発達や認知的発達など発達心理学の知識が不可欠である。

おわりに

愛着研究のツールとしてのCAIの妥当性と信頼性は、欧米ではほぼ確立

されている。また、心理臨床や福祉の領域において、個々のケースの親子関係を査定し、支援や介入の効果検討を行うにあたって、CAIは有用なツールとして評価されつつある。

日本での実施に向けては、まず石井・森田・伊藤（2012）による質問項目の日本語版をもとに、妥当性と信頼性の検討を行う必要があり、Takahashi & Hatano（2009）がAAIに関して指摘した点も含めて、十分に検討する必要がある。多くの課題が予想されるものの、日本でもCAIを実施できるようになれば、乳幼児期から児童期、青年期までの愛着の安定性および可変性を実証的に検討することが可能となる。乳幼児と成人に加え、これまで愛着の査定がほとんど不可能であった小学校中学年以上の児童生徒における愛着を測定することが可能となることは、一般家庭の児童はもとより特にリスク・グループの児童の愛着形成や再形成を検討するにあたり、重要な意義があると考えられる。

文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Ammaniti, M., van IJzendoorn, M.H., Speranza, A.M., & Tambelli, R. (2000). Internal working models of attachment during late childhood and early adolescence: An exploration of stability and change. *Attachment and Human Development*, 2, 328-346.
- 安藤智子・遠藤利彦（2005）. 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦（編著）アタッチメント—生涯にわたる絆（pp. 127-148）ミネルヴァ書房
- Armsden, G., & Greenberg, M. (1987). The inventory of parent and peer attachment: Individual differences and their relationship

- to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 427-454.
- Behrens, K.Y., Hesse, E., & Main, M. (2007). Mothers' attachment status as determined by the Adult Attachment Interview predicts their 6-year-olds' reunion responses: A study conducted in Japan. *Developmental Psychology*, 43, 1553-1567.
- Borelli, J.L., David, D.H., Crowley, M.J., & Mayes, L.C. (2010). Links between disorganized attachment classification and clinical symptoms in school-aged children. *Journal of Child and Family Studies*, 19, 243-256.
- Borelli, J.L., Somers, J., West, J.L., Coffey, J.K., De Lo Reyes, A. & Shmueli-Goetz, Y. (2016). Associations between attachment narratives and self-report measures of attachment in middle childhood: Extending evidence for the validity of the Child Attachment Interview. *Journal of Child and Family Studies*, 25, 1235-1246.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol 2. Separation*. London: Hogarth Press.
- Brumariu, L. E. (2015). Parent-child attachment and emotion regulation. In G. Bosmans & K. A. Kerns (Eds.), *Attachment in middle childhood: Theoretical advances and new directions in an emerging field*. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 148, 31-45.
- Emde, R.N., Wolf, D., & Oppenheim, D. (2003). *Revealing the inner worlds of young children: The MacArthur Story Stem Battery and parent-child narratives*. New York: Oxford University Press.
- 遠藤利彦 (2010). アタッチメント理論の現在—生涯発達と臨床実践の視座からその行方を占う— *教育心理学年報*, 49, 150-161.
- Ensink, K., Normandin, L., Target, M., Fonagy, P., Sabourin, S., Berthelot, N. (2014). Mentalization in children and mothers in the context

- of trauma: An initial study of the validity of the Child Reflective Functioning Scale. *British Journal of Developmental Psychology*, 33, 203–207. <https://doi.org/10.1111/bjdp.12074>
- Fearon, R.P., Bakermans-Kranenburg, M.J., van IJzendoorn, M.H., Lapsley, A.M., & Roisman, G.I. (2010). The significance of insecure attachment and disorganization in the development of children's externalizing behavior: A meta-analytic study. *Child Development*, 81, 435–456.
- Fonagy, P. Gergely, G., Jurist, E., & Target, M. (2002). *Affect regulation, mentalization, and the development of self*. New York: Other Press.
- George, C., & Solomon, J. (2016). The Attachment Doll Play Assessment: Predictive validity with concurrent mother-child interaction and maternal caregiving representations. *Frontiers in Psychology*, 7, 1594. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2016.01594>
- Green, J., & Goldwyn, R. (2002). Annotation: Attachment disorganization and psychopathology: new findings in attachment research and their potential implications for developmental psychopathology in childhood. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 43, 835–846.
- Greenberg, M.T. (1999). Attachment and psychopathology in childhood. In J.Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment, theory, research, and clinical applications*. New York: Guilford Press. 469–496.
- Groh, A.M., Fearon, R.P., Bakermans-Kranenburg, M.J., van IJzendoorn, M.H., Steele, R.D., & Roisman, G.I. (2014). The significance of attachment security for children's social competence with peers: A meta-analytic study. *Attachment and Human Development*, 16, 103–136. <https://doi.org/10.1080/14616734.2014.883636>
- Grossmann, K.E. (1999). Old and new internal working models of attachment: The organization of feelings and language.

- Attachment & Human Development*, 1, 253-269. <https://doi.org/10.1080/14616739900134141>
- Hennighausen, K.H., Bureau, J., David, D.H., Holmes, B.M., & Lyons-Ruth, K. (2011) Disorganized attachment behavior observed in adolescence. In J. Solomon & C. George (Eds.), *Disorganized attachment and caregiving*. New York: Guilford Press. 207-244.
- Hesse, E. (1999). The Adult Attachment Interview: Historical and current perspectives. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: theory, research, and clinical applications*. New York: Guilford Press. 395-433.
- Hesse, E. (2016). The Adult Attachment Interview: Protocol, method of analysis, and selected empirical studies: 1985-2015. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: theory, research, and clinical applications. Third edition*. New York: Guilford Press. 553-597.
- 石井礼花・森田健太郎・伊藤明子 (2012). *Child Attachment Interview (CAI) 日本語版* 未公表
- Joseph, M.A., O'Connor, T.G., Briskman, J.A., Maughan, B., & Scott, S. (2014). The formation of secure new attachments by children who were maltreated: An observational study of adolescents in foster care. *Development and Psychopathology*, 26, 67-80.
- Kerns, K.A., Kelpac, L. & Cole, A. (1996). Peer relationships and preadolescents' perceptions of security in the child-mother relationship. *Developmental Psychology*, 32, 457-466.
- Lewis, M., Feiring, C.F., & Rosenthal, S. (2000). Attachment over time. *Child Development*, 71, 707-720.
- Luyten, P., & Fonagy, P. (2014). Mentalizing in attachment contexts. In P. Holmes & S. Farnfield (Eds.), *The Routledge handbook of attachment: Theory*. East Sussex :Routledge. 107-126.

- Main, M. (1996). Introduction to the special section on attachment and psychopathology: 2. Overview of the field of attachment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 237-243.
- Main, M., & Cassidy, J. (1988). Categories of response to reunion with the parent at age 6: Predictable from infant attachment classifications and stable over a 1-month period. *Developmental Psychology*, 24, 415-426.
- Main, M., & Solomon, J. (1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during Ainsworth strange situations. In M. Greenberg, D. Cicchetti, & E.M. Cummings (Eds.), *Attachment in the pre-school years: Theory, research and intervention*. Chicago: University of Chicago Press. 121-160.
- Moss, E., Bureau, J., St-Laurent, D., Tarabulsky, G.M. (2011). Understanding disorganized attachment at preschool and school age. In J. Solomon & C. George (Eds.), *Disorganized attachment and caregiving*. New York: Guilford Press. 52-79.
- Phillips, D. (2014). Using the Child Attachment Interview. In D. Shemmings & Y. Shemmings (Eds.), *Assessing disorganized attachment behavior in children: An evidence-based model for understanding and supporting families*. London: Jessica Kingsley Publishers. 138-164.
- Privizzini, A. (2017). The Child Attachment Interview: a narrative review. *Frontiers in Psychology*, 8, Article 384. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2017.00384>
- Shmueli-Goetz, Y. (2017). *The Child Attachment Interview: Administration & coding*. Unpublished manuscript, University College London.
- Shmueli-Goetz, Y. (2014). The Child Attachment Interview. In S. Farnfield and P. Holmes (Eds.), *The Routledge handbook of attachment: Assessment*. East Sussex :Routledge. 119-132.

- Shmueli-Goetz, Y., Target, M., Fonagy, P., & Datta, A. (2008). The Child Attachment Interview: A psychometric study of reliability and discriminant validity. *Developmental Psychology*, 44, 939-956.
- Shmueli-Goetz, Y., Target, M., Datta, A., & Fonagy, P. (2011). *Child Attachment Interview coding and classification manual, Version VI*. Unpublished manuscript, University College London.
- Takahashi, K., & Hatano, G. (2009). Toward a valid application of the Adult Attachment Interview to the Japanese culture and language: The need for ethnographic adaptation. *Seishin Studies*, 112, 41-63.
- 高橋恵子・石川江津子・三宅和夫 (2009). 愛着の質は変わらないか—18年後の追跡研究 三宅和夫・高橋恵子 (編著) *縦断研究の挑戦* (pp. 135-148) 金子書房
- Target, M., Fonagy, P., & Shmueli-Goetz, Y. (2003). Attachment representation in school-age children: The development of the Child Attachment Interview (CAI). *Journal of Child Psychotherapy*, 29, 171-186.
- Target, M., Fonagy, P., Shmueli-Goetz, Y., Datta, A., & Schneider, T. (2007). *The Child Attachment Interview (CAI) protocol, Revised Edition VIII*. Unpublished manuscript, University College London.
- 上野永子・北川 恵 (2017). 面接法—成人アタッチメント面接 北川 恵・工藤晋平 (編著) *アタッチメントに基づく評価と支援* (pp. 102-116) 誠信書房
- Venta, A., Shmueli-Goetz, Y., & Sharp, C. (2014). Assessing attachment in adolescence: A psychometric study of the Child Attachment Interview. *Psychological Assessment*, 26, 238-255.
- Waters, E., Weinfield, N.S., & Hamilton, C.E. (2000). The stability of attachment security from infancy to adolescence and early adulthood: General discussion. *Child Development*, 71, 703-706.

- Wright, J.C., Binney, V., & Smith, P.K. (1995). Security of attachment in 8- to 12-year-olds: A revised version of the Separation Anxiety Test, its psychometric properties, and clinical interpretation. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 36, 757-774.
- 山川賀世子 (2006). 幼児の愛着の測定—Attachment Doll Playの妥当性の検討. *教育心理学研究*, 54, 476-486.
- Zimmermann, P. & Iwanski, A. (2015). Attachment in middle childhood: Associations with information processing. In G. Bosmans & K. A. Kerns (Eds.), *Attachment in middle childhood: Theoretical advances and new directions in an emerging field. New Directions for Child and Adolescent Development*, 148, 47-61.

付記

筆者は2017年にShmueli-GoetzらによってAFCで行われたCAIの研修に参加し、2018年に認定コーダーの資格を得た。CAI日本語版は石井礼花氏より提供を受けました。田中かおり氏には本論文執筆時に助言をいただきました。記して感謝いたします。